

太平洋島嶼学特論レポート
～海外研修を通して感じたこと～

下敷領一平
医歯学総合研究科
修士課程 1 年

1. はじめに

今回、太平洋島嶼学特論の授業として、ミクロネシア連邦・グアムを訪れた。国内研修とは異なり、海外研修ならではの貴重な体験をたくさんすることができ、異文化や歴史を肌で感じる事ができた。現地を訪れ、現地の人との触れ合うことで、机上の学びではできない数多くの気づきや学びがあった。電気もない生活の場でさらに島という孤立した環境で生きることが、どのようなものなのか身をもって経験することができた。そうした中で、自分自身がこの世の中に生きていること、自分自身がこの地球に生まれたこと、それらの意味を考え直すことができた。個人的にはミクロネシア連邦とグアムを訪れるのは初めてであり、今回の研修全体を通して感じたことを中心に時系列に沿って述べていきたいと思う。

2. ミクロネシア連邦を訪れて感じたこと

9月6日、福岡空港を出発。ユナイテッド航空のグアム行き便に乗り、約4時間のフライトとなった。グアム空港では乗り継ぎのため、滞在時間は少なかった。グアム空港から同じ飛行機で約3時間、ミクロネシア連邦のチューク州の州都であるウエノ島へ向かった。到着後、まずホテルの迎えの車で空港からホテルに向かったのだが、悪路に驚いた。出発前に聞いていた話ではあったが、道路整備は行き届いておらず、激しい車の揺れもあったため、車酔いするメンバーもいた。距離的には遠くはないが、空港からホテルまでの移動も結構な時間を要した。福岡空港を出てから、グアム空港で乗り継ぎを行い、チューク空港に着いて、移動でハードな一日となったが、翌日からのピス島での研修が楽しみで疲れもすぐに吹き飛んだ。

9月7日、台風の影響によっては船が出るかどうか、ピス島に行けるかどうか危ぶまれたが、なんとかピス島へ行くことができた。小さな漁船に乗って約1時間の航海だった。雨が降り、風が吹き、悪天候の中での船の移動だったが、いよいよだと思いつつ、ワクワクしていると、あっという間に島に到着した。到着後、鰹釣りの漁に出るということだったので、こんなチャンスはめったにないと思い、一緒に行かせて頂くことになった。鰹は小魚を餌にしており、その小魚を海鳥が追っている。小さな漁船に乗り、海鳥の群れを目視し、近くまで行って、鰹を釣る。この繰り返しで、約3時間近く海に出ていた。その晩は、鰹の料理を美味しく頂いた。まさに自給自足の生活を体験することができ、生きていることに感謝するとともに、生き物と共に暮らす世界の素晴らしさに感動した。

9月8日、午前中、現地の子供たちと一緒にピス島を散策した。小さな集落ごとにそれぞれ生活をしており、どこの家でも現地の人々の明るい笑顔が印象的であった。現地の人との会話で、何が不便かと尋ねると、何も不便でないと答えていた。ピス島での自慢は何かと尋ねると、一緒に生活するこの家族だと言っていた。私は、島特有の結いの精神を感じた。

現在、鹿児島県の離島医療の研究をしている中で、離島へ行き、島で暮らす人々と会話をする機会が多い。そこで感じる事が、世界の島々、このミクロネシア連邦チューク州ピス島でも、同じだと感じる事ができた。家族とのつながりを大切にし、支え合いながら共に生きる姿に、心が嬉しくなった。午後はピス島から船で約 20 分離れたところにある無人島へ行った。透き通った海に癒され、生い茂るジャングルに魅了され、無人島での一時を楽しむ事ができた。一緒に行った 2 人の少年と少女に連れられ、私はジャングル探索を行った。彼らが陸ガニを採集し、私がそれを袋に入れて持つという役割だった。裸足でナイフを持ちながら、どんどん奥へと進んでいき、木の根元に隠れているカニを捕まえ、疲れた時はそこらに落ちているココナッツを割って、手作りココナッツジュースを作って頂いた。彼らのたくましい姿や優しい心が、強く生きることがどれほど素晴らしいことかを証明しているようだった。島へ帰り、その夜はピス島での最後ということもあり、遅くまで現地の人との交流を楽しんだ。ピス島での滞在は短かったので、現地のことを少しでも理解したい、現地の人との交流を大切にしたいと、時間があるときはなるべくコミュニケーションをとるようにした。私のつたない英語の理解に苦しんでいる姿をみて、もっともっと英語を勉強する必要があると痛感した。カードゲームでは最初はルールがよくわからなかったが、丁寧に教えて頂きながら一緒に楽しんでいるうちに、最後には勝つこともできた。現地の人と過ごす時間がとても楽しく、肌の色の異なる人と一緒に笑いながら過ごすこと、同じ人間であり共にこの地球で生きていることに、いつまでも平和であってほしいと心から願う夜だった。

9月9日、昼前にピス島を出発した。最初は日本との環境や生活様式の違いに戸惑いもあったが、現地の人の優しさに触れ、元気な子供たちの目の輝きに感動とパワーをもらい、さらに自然の豊かさに癒やされ、とても充実したピス島での3日間だった。昼過ぎにウエノ島に到着した。午後からチューク州のパブリックヘルスセンター（保健所）を訪問させて頂いた。チューク州での公衆衛生の現状として、感染症なども多いが生活習慣病も同じくらい多いとのことだった。ワクチン接種を行ったり、疾患予防のための啓蒙活動などを行ったり、限られた医療資源の中で精一杯業務されている様子だった。また、島特有の問題である医師不足の現状についても教えて頂いた。小さな島への診療を行ってはいるが、なにせ数が少なく、医療支援が行き届いていないというのが現実問題であった。同じ離島というフィールドで、疫学予防的観点より公衆衛生学に携わる者として、現地のパブリックヘルスセンターの職員と交流できて、貴重な出会いの場を頂いたことに感謝するとともに、いつかよりグローバルな研究を行う際に、ミクロネシアと日本における予防疫学研究ができればと思った。地球規模で物事を考えられるリーダーとして、世界で活躍できるように勉学に励み、離島研究を深く掘り下げていけるように頑張りたい。

忙しい仕事の合間にもかかわらず、私たち学生に貴重なお話を頂いたパブリックヘルスセンター職員の Angie William さん、そしてこのような機会をコーディネートして下さいました。山本先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

3. グアムを訪れて感じたこと

9月10日、チューク空港を出発し、グアム空港へ到着。リゾート地として有名なグアムは、観光客のほとんどが日本人と言われ、空港の検問も日本人でいっぱいだった。空港について迎えに来て頂いたのは、以前ピス島で村長をされていた方の家族で、夜はその家族の自宅でパーティーを開いて頂いた。そこで私たちは犬の肉を頂くことができた。生まれて初めて食する犬の肉であったが、既に調理済みだったためか臭みはなく、個人的にはジューシーで美味しかった。また、比較的年齢の近い若者と一緒にダンスを踊ったり、歌ったりした。ヒアリングが苦手であったので、彼らとうまく会話を広げることができなかったが、自慢の「笑顔」でなんとかかしたというのが、正直な感想である。生の英語を体験することができたので、これからさらにそのような機会を増やしていき、英語のヒアリング能力だけでなく、全体的な英語能力のスキルアップを図りたい。

9月10日、グアムの南部をレンタカーでドライブしながら、太平洋戦争歴史博物館、グアム大学などを訪れ、グアムの歴史・文化を学ぶことができた。戦後70年で節目の年に、アメリカ側からみた太平洋戦争の歴史について学ぶことができた。全世界が永久に平和であることを強く願っている。グアム大学では、Yukiko Inoue 先生のお話を伺うことができた。日本における英語教育のあり方や男女共同参画社会のあり方など、先生の考えを伺うことができ、今以上にグローバルな視野で研究に取り組む必要性を感じた。日本へ帰ってからも仲間とシェアして、自分たちにできることを少しずつ実現していきたいと思った。

9月11日、グアム空港を朝出発し、福岡空港へ到着。無事、日本に帰国することができ、太平洋島嶼学特論の海外研修の全日程が終了した。

4. おわりに

研修全体を通して、一番深く心に刻まれた思いは、「平和」である。ピス島での子供たちの笑顔を見ることができ、様々な人種の方々と異なる言語でコミュニケーションをとることができ、みな同じ人間であり、共に生きている、この地球のどこかで、それぞれのライフスタイルで生活しているのだと実感した。そのような経験ができたのも、このように感じることもできたのも、平和であるからだと思う。世界が永久に平和であり続けられるように、今の自分に何ができるのか常に考えていきたい。そして、平和な世の中を実現するために、勇気ある一歩を踏み出して、行動に移していきたい。

今回お世話になりました関係者の方々、ご支援頂いた鹿児島大学、そしてこの授業を担当し、6日間私たち学生の面倒をみて、たくさんの出会いの場をコーディネートして下さった山本先生には心から感謝しております。この授業に参加できて、とても幸せでした。本当に、ありがとうございました。